
エバーグリーン

日ノ月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エバーグリーン

【Nコード】

N7751Y

【作者名】

日ノ月

【あらすじ】

屋敷に軟禁されてる少女エミリアは、ある日竜に乗った少年ギルバートと出逢い。生まれて初めて屋敷の外に飛び出した。

これは少年と少女の物語だ。

竜に乗った少年。（前書き）

この物語はフィクションです。

竜に乗った少年。

春、夏、秋、冬、季節は変わろうが、屋敷の窓から見える、この景色はいつも変わらない。

私は、窓辺に静かに立つと、外の世界を眺めた。

季節は春。窓から見える丘には一本の桜の木があった。

私は、ここからその桜の木を眺めるのが好きだ。

あの桜の木に触れてみたい。

その生命の鼓動を肌で感じたい。

でも、私にはそれが許されない。

あの桜の木に触れる事も。自由に野ばらを駆け回る事さえも許されない。

私は駕籠の中の鳥だ。

自由な空へ羽ばたく翼など持たない憐れな鳥。

それが、私、エミリア・イルマーレだ。

「ふう」

私は読み終わった本を、小さな木製の丸テーブルに置いた。

眼鏡を本の側に置き、ベッドの上に、スカートが乱れる事を気にせずに仰向けに寝転がった。誰も見てないのだから、良しとしよう。

「はあ……本当に退屈よね」 独り言が口から漏れる。

私は、手足をバタバタさせてみたり、うーッ、と訳のわからない奇声を発してみるが、相手にしてくれる人が、誰もいないので虚しいだけだ。

この屋敷には数人の使用人やメイド達が住んでおり、皆、私用に屋敷を留守にしている為、この広い屋敷で、いま私は一人ぼっちだ。

「もう。みんな早く帰ってこないかな」

別に寂しい訳じゃないの。ただ遊び相手がいないと退屈なだけよ。

はあ、と二度目のため息をついた時、ドーンと、もの凄い音が屋敷内に響いた。

「ひゃあ!!」

その音に驚き、私は思わず上半身を起こした。

「……なに？今の音は……？」

両目をきよろきよろさせ、頭を左右に動かす。やがて音がしたと思われる方向に顔を向ける。

「屋根？」

巨大な石を空から落としたような音は、確かに上から聞こえてきた。

「なんだろう？」

使用人達からは、部屋から絶対に出ない様にと、きつく忠告されていたけれど、身体の内側から沸き上がる好奇心を抑えられそうにない。

私は部屋のドアノブに手をかけた。

「やっぱり鍵をかけているわね」

予想した通り、ドアには鍵がかかっていた。

でも、これぐらいで諦める私じゃない。

ドアから出れないなら窓から出ればいいのよ。

私の部屋は二階にあるので、屋根に上がるには、両手を伸ばせば届くのだ。

窓から身を乗り出し、スカートが風に煽られながら、私は僅かな出っ張りに脚をかけて、両手を屋根の端に伸ばした。

両腕にありたっけの力を込めて、一気に身体を屋根の上に持ち上げた。

「結構たくましいじゃない、私」

乱れた息を整え、私は屋根の上を、人生で初めて歩いていった。

屋根は斜めに傾いているので、一歩でも足を滑らしたら、そのまま地面に落ちてしまう。

一瞬、冷やとしたが、私は屋根の上を進むと決意した。
やはり、あの音の正体が気になるからだ。

（嘘　？あれ、て、ドラゴン？）

私が昇った屋根の反対側にいたのは、小さな赤い竜と灰色の髪をした男の子だった。

（どうしよう。まだ気づいてないようだけれど）

灰色の男の子は赤い竜の頭を撫でているのに夢中で、どうやらこちらに気づいてない様子だ。

しかし、赤い竜の方は違った。

私の存在に気づくと、赤い竜は雄叫びを上げてきた。

その迫力に驚き、私は足を踏み外してしまい、滑り台の様に屋根の上を滑り落ちる。

「危ない！！」

屋根から身体が落ちる瞬間、誰かが私の細い腕を握ってきた。
その手は灰色の男の子の手だった。

その藍色の瞳が私の瞳と合い、彼の頬が赤く染まる。

私も頬が熱くなるのを感じた。

「もう少しだけ堪えて！」

男の子は私を引っ張り上げようと力を込める。
宙ぶらりんとなった私は視線を下に向けた。これ以上、彼を直視
出来ないからだ。

「下を見てはダメだ！」

庭園が見えた。噴水に、薔薇園、煉瓦の道。悪いイメージが頭に
浮かぶ。

自分の身体が地面に横たわっていて、頭から血を流している鮮烈
なイメージが。

強烈な目眩が私を襲った。視界がぐらぐらと揺らぐ。

「きゃあああああッ！！」

「頼むから暴れないで！！ うわぁ！！」

彼の身体がぐらりと前に傾き

呆気なく、私達は落ちた。

地面に叩きつけられるヴィジョンを想像しながら、その恐怖に堪
えきれず、両目をぎゅっと瞑る。

しかし、いくら待てども地面に落ちる衝撃も全身の骨が碎ける痛
みも訪れて来ない。

恐る恐る、両眼を開けると、目の前に灰色の男の子の顔があつた。
初めて、その顔を間近で見ただけでも、端正な顔立ちをしている
と思う。灰色の髪に、藍色の優しい瞳、きりとした眉毛。青銅
の鎧を身につけた少年は安堵の表情を浮かべていた。

「大丈夫かい？」

「というか、顔が近い！」

鼻と鼻が触れるぐらいの距離に彼の顔が。おまけに彼の手がずつ
と私の手を握っていた。顔が熱い。

「わ、わ、私は、だ、大丈夫です！」

呂律が上手く廻らず、テンパってしまう。

だってしょうがないじゃない！屋敷の使用人以外で男性と触れ合うのは初めてなんだからっ！！

誰に対しての言い訳が分からず、私は羞恥に負けて、視線を下に落とした。

そうしてようやく気づいた。

私が乗ってる背中の中体。

（私、ドラゴンに乗ってる？おまけに空を飛んでるわ！）

「ドラゴンに乗るのは初めて？」

「うん！初めてよ！空を飛んだのも初めて！屋敷の外に出たのも初めてよ！」

私は彼に笑顔を向けた。

「あ、…………え、と。そうなんだ」

彼は頬を赤らめ、指をもじもじとさせているのは何故でしょう？

「ねえ！お願いがあるんだけど！」

これは願ってもないチャンスだ。こうして外に出る事が出来たのだから、行きたい。

あの桜の木の下に

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7751y/>

エバーグリーン

2011年11月23日12時57分発行